連載12

植物の方言〈かぼちゃ（南瓜）〉
―方言になった外国語―

珍しい白カボチャです。
「おいしいかな」とペロリ。
森下果南ちゃん（1歳・旭町）

〈かぼちゃ〉は、甘藷、馬鈴薯、玉蜀黍などとともに、十六世紀末から十七世紀初めにかけて日本に渡来した作物で、中でも〈かぼちゃ〉は、十六世紀末にキリスト教布教のため日本を訪れたポルトガル人によって九州にもたらされ、その後全国に広まったとされています。現在共通語形とされ、方言形としても東日本を中心に広く分布するカボチャは、そのポルトガル人たちが〈かぼちゃ〉をさして言った「カンボジア産の瓜」を意味する呼称の「カンボジア」に由来すると言われています。

さて、小松でも最近は、若い世代を中心に共通語形カボチャが急速に普及していますが、年輩の方々からは今もボブラ（ほかにボーブラ、郷谷川中流域から梯川中流域にかけてのボクラ、大杉谷川上流域のボッバ、ボンバ・ボーバなど）という方言形をよく聞くことができます。ボブラの類の分布は意外にも広く、北陸では小松を含む石川県の全域とそれに続く富山県西部と富山県東部の一部に分布し、さらにナンキンの分布域（福井県嶺北地方から近畿地方）をはさんで中国・四国・九州地方の広い範囲に分布します。分布から見て、西日本ではナンキンよりも古い形と考えられるこのボブラも、実は中世末にポルトガル人によって伝えられた〈かぼちゃ〉を意味するポルトガル語abóbora（ボーブラ）に由来するものなのです。中世末にポルトガル人が伝えたポルトガル語の中には、カステラ、パン、タバコ、ボタン、カルタなどのように日本語（外来語）として定着したものもありますが、方言の世界にだけその名残をとどめているボブラのような例もあるのです。

ところで、ボブラ（ボブラカス、ボブラスケなどの形でも）はまた、〈かぼちゃ〉の中が空洞であることに喩えて、頭が空っぽ、つまり「頭の悪い人」「馬鹿な人」などをさして言うとの説明を、小松の平野部・海岸部を中心とした多くの町の方々から伺いました。人を褒めることばよりも貶すことばが豊富なのも方言の世界の一つの特徴と言えそうです。

連載13

植物の方言〈露草〉

ツユクサ。青い花が咲く

夏に野や道端で可憐な青色の花を咲かせる雑草〈露草〉をご存じでしょうか。群生して日照りにも強いので、時に嫌がられるこの草の名の世界にも、意外な方言の花が咲き誇っています。

共通語形としての新しい呼び名と思われるツユクサ（ツユグサ）は、小松市内の平野部を中心に広い範囲で聞かれますが、ツユクサ以外にも、コーヤノタロベ、コーヤンタロ、タロベグサ、タロベ、タロボシなどといった、一風変わった呼び名が年輩の方々から聞かれました。

コーヤノタロベ・コーヤンタロベは、北部の蛭川・長崎・小島、梯川流域の古府・一針・白江、海岸部に近い浜佐美本町などに分布します。また、大杉谷川中上流部には、似た形のコーヤノタロ（大杉中町）・コーヤンタロ（大杉本町・赤瀬）・コーヤノヒコ（大杉中町・下大杉町。ヒコは「曾孫」）も分布します。これらをまとめてコーヤノタロベ類と呼ぶことにします。

北部鍋谷川流域・南部地区・海岸部のタロベグサ・タロベ、滓上川流域・郷谷川流域・大杉谷川下流域のタロボシ・タロベシ・タロブシなどを取り囲むように、市内周辺部に分布するコーヤノタロベ類が、タロベグサ・タロベ、タロボシなどの元の形であることは明らかです。

コーヤノタロベ類のコーヤとは「紺屋」で染物屋をさす方言です。おそらく、〈露草〉の花の青色から紺屋の染め物の青を連想して名付けたものでしょう。江戸中期の全国方言集『物類称呼』（一七七五年刊）に〈露草〉を近江で「こんやたらう」、加賀で「こうやめん」、江戸後期の『諸国採薬記』（一八三一・三六年刊）に近江坂田郡で「こうやのたらう」の記載がありますので、小松で独自に生まれたものではなく、江戸期以降に近畿方面から伝わった呼び名と思われます。その過程で、「紺屋の太郎（染物屋の長男）」が「紺屋の太郎兵衛」に形を変えたのでしょう。

ほかには丸山・中ノ峠でハナガラ、尾小屋・安宅新でインクバナ、インキグサ、蓮代寺・木場でトンボグサ、平面でテングサンなどといった呼び名も聞かれました。

連載14

植物の方言〈彼岸花〉

「昔や、きのこ採りに行くと、山のあぜ道にいっぱい咲いとったね。真っ赤でかわいらしいもんです」と92歳の上田しかさん（加賀ハ幡）、そばで水仙が香る

今月は、秋の彼岸のころに田畑の土手、寺の境内や墓地などに、鮮やかな赤色の美しい花を咲かせる〈彼岸花〉の方言を取り上げます。別名を曼珠沙華、死人花とも言います。

美しいのに嫌われ者の花

あんなにきれいで魅力的な〈彼岸花〉ですが、「家に持ち帰るのはよくない」（遊泉寺）、「オコリ（熱病のマラリア）になると言われ、避けて通った」（八幡）、「死体を埋めた後に咲いた花と言われ、嫌がって家には飾らなかった」（若杉）などの話や、別名「死人花」からもわかるとおり、実はかわいそうな嫌われ者の花なのです。この花や球根が猛毒成分を含むことがその理由のようです。

そんな〈彼岸花〉を小松では、ヒガンバナ、ベロマガリ・ヘラマガリ、テクサリバナ、ハミズハナミズ、ドクバナなどの名で呼んできました。ヒガンバナは咲く季節に注目した名。市内中北部のベロマガリ・ヘラマガリの分布域を除いた広い範囲で聞かれます。丸山や郷谷川・大杉谷川上流部などの山間部にも分布しますから、小松では古くからの呼び名と思われます。

なめると舌が曲がる？

これに対し、ベロマガリは北の辰口町・寺井町に接する鍋谷川流域とその西の地域、そして滓上川最上流部の中ノ峠に、ヘラマガリは隣接する滓上川下流域と南に続く郷谷川・大杉谷川下流部に分布します。ベロ・ヘラはいずれも「舌」で、花弁の形が舌に似ていて、その毒性が「これをなめると舌が曲がる」といった伝承を生み、これらの呼び名が独自の分布域を形成したものでしょう。テクサリバナは滓上川中流域（原、麦口）に分布します。「触ると手が腐ると言われた」との説明も聞かれ、ベロ（ヘラ）マガリの分布域の中で、新たに派生した呼び名と考えられます。ドクバナ（毒花）は南部地区の林・粟津・白山田で聞かれました。

ハミズハナミズは、〈彼岸花〉に似た別の花をさすとの回答が多くの地点で聞かれたのですが、花茎が枯れたあとに葉が出るという共通の特徴から〈彼岸花〉の名に転用されたようです。南部日用川流域と海岸部の9地点で聞かれました。

連載15

〈胡座〉と〈正座〉の方言

「そういえば私の生まれた紀州の山奥（和歌山県西牟婁郡）では、あぐらのことをオタグラといいますなー」と横矢盛雄さん（加賀ハ幡、写真右）
「小さいとき、アグチかいてメシを食べるとおこられたもんです（笑）」管理人の石田孝太郎さん（茶屋町）＝いこいの森旧中村家のいろりを囲んで

生活様式の洋風化で、椅子に腰掛けることがめっきり多くなってきましたが、床や畳の上では、やはり〈胡座〉や〈正座〉が似合います。今回はそんな〈胡座〉と〈正座〉の方言です。

〈胡座〉はアグチ一色の世界

〈胡座〉の方言は、動詞形ネマルを使う大日川上流部の丸山以外のすべてで、アグチ（カク）が聞かれました。アグチは石川県から富山・新潟両県の広い範囲に分布します。足袋などの足をはき入れる口を意味する「開口（あきくち）」の部分で足を組むところから、アキクチ→アイグチ→アグチと変化した形です。

〈正座〉は何と50種以上もの方言形が

一方、〈正座〉の方言は対照的に実に多彩です。これまでの市内80集落の調査で、何と50種以上もの方言形を聞くことができました。そのうち、動詞ツクバウに由来すると思われるオツクバイ（カク）の類がほとんどを占めています。

まず、オツクバイとそれに近い形が、市内周辺部の、大日川・郷谷川上流部丸山（オツッバイ）・尾小屋（オツクバイ）、大杉谷川上流部（ウツッバイなど）、滓上川最上流部中ノ峠（ウツッバ）、海岸部に近い日末（ウツクバイなど）に分布します。一方、オツクバイの類から変化したと考えられるウツブラ、ウツブカイの類、ウツブカイ類がさらに変化したと考えられるウツブキの類が、それぞれまとまった分布を見せています。ウツブラ類（ウツブラ・オツブライ・ウツブライ・オツバリ、ウツバリ・ウツッパイ・ウツッペなど）は郷谷川流域と海岸部、ウツブカイ類（ウツブカイ・オツブカイなど）は木場潟周辺から南部地区、ウツブキ類（ウツブキ・オツブキ・ウツブケ・オツンバキ・ウツバキなど）は北の滓上川・梯川流域に分布します。

ほかに、辰口町・寺井町と接する一部地域ではオネマリといった形がまとまって聞かれました。

〈胡座〉と違い、「〈正座〉しなさい」とは大人が子供に向かって言うことが多いもの。〈正座〉に50種以上もの方言形が生まれたのは、そんな事情と深い関係がありそうです。

連載16

〈目高〉の方言

卵からメダカの赤ちゃんが生まれたよ。かわいい！
蓮井皓貴くん（8歳・蓮代寺町）、英仁くん（6歳）、茉紀ちゃん（4歳）

昨年、環境庁が絶滅の恐れがあると発表した〈目高〉のことが最近よく話題になります。本誌6月号にも小松での〈目高〉の生息調査の記事が出ていました。

小学校唱歌にも歌われ、以前は日本中の池や小川で見ることができ、子供たちにとって格好の遊び相手だった〈目高〉。今回はその〈目高〉の方言について見ることにします。

全国で一番方言の種類が多い〈目高〉

子供の関心を引きやすい遊びや小動物、植物の名には方言の種類が多いと言われます。辛川十歩という人の調査では、〈目高〉の方言はなんと全国で5、000種ほどもあり、方言の種類の最も多いものとされています。となると、小松市内でもさぞ多くの〈目高〉の方言が、と期待したくなるのですが、意外にその種類は多くありませんでした。小松で聞かれる〈目高〉の方言は、大きく分けると2種類になり、一つは共通語形と同じメダカ。もう一つはメメジャコ、あるいはそれに似た形のものです。

江戸時代には関東でメダカ、京都ではメメザコ

メダカもメメジャコも文献では中世末ごろにすでに登場します。江戸時代の全国方言集『物類称呼』（一七七五）には「めだか。東武にて、めめざこ（以下略）」とあり、共通語形メダカがすでに江戸期から関東地方で使われていたことが分かります。またメメザコ（目目雑魚）の類は現在、北は東北から南は九州までの広い範囲に分布しています。京都を中心に江戸期以降全国に広まったもののようです。

小松のメメジャコの類には、メメジャコのほか、メメンジャコ、メメンジャンコ、メーメンジャコ、メメンジャッコ、メミンジャコ、メメンジャク、メジャコなどがあります。中でもメメンジャコの分布が広く、辰口町に接する下八里・河田館あたりから小松バイパスに沿って南部の津波倉・粟津・矢田野あたりまでと、北部の梯川流域などで聞かれました。

〈目高〉の数が減少する中、メメジャコ類の方言も次第に聞かれなくなるかと思うと残念な気がします。

連載17

〈蛍〉の方言と〈蛍とり歌〉

想像してみてください。
静かな夜、夜露にぬれた苔のじゅうたんの上に飛び交うホタルの群れ…びっくりするほどきれいですよ
日用町にある「苔の園」で働く大西美根子さん（日用町・写真右）、高平百合子さん（加賀市）

6月末から7月、夜に淡い光を点滅させながら飛び交う〈蛍〉。一時期、数が激減したと言われますが、最近はまた少しずつ増えてきたようです。普段、夜に出歩くことを許されなかった子供たちにとって、暗い中、ちょっぴりスリルを感じながらの蛍とりは実に楽しい遊びでした。

ホタル以外にホタルコ、ホッタルコ、ホッタリコも

これまでの調査から、小松での〈蛍〉の方言形は、共通語形と同じホタル（ホータルを含む）が最も広い範囲で聞かれ、ほかにホタルコ、ホッタルコ、ホッタリコが聞かれました。ホタルコは郷谷川流域の尾小屋・松岡、滓上川流域の中ノ峠・麦口・中海、南部の二ツ梨・白山田・菩提などに、ホッタルコ、ホッタリコは滓上川中・下流域、大杉谷川下流域、鍋谷川流域とそれに続く梯川流域、小松バイパス沿いの集落にまとまった分布が見えます。おそらくホタルコが古く、それからホッタルコ、さらにホッタリコが生まれたものでしょう。

♪ホタルコ　ツイコ　ツリャオル　コイヤ〜

ところで調査では、〈蛍〉を捕まえるときに歌った〈蛍とり歌〉についても尋ねました。多くの集落では「ホー　ホー　ホータル　コイ　アッチノ　ミーズワ　ニーガイゾ　コッチノ　ミーズワ　アーマイゾ」という一般的な歌でしたが、北部の鍋谷川流域、滓上川下流域の10以上の集落で「ホタルコ　ツイコ〜」といった歌詞で始まるものが聞かれました。

♪ホタルコ　※ツイコ　※ツリャ　オルコイヤ　アッチノ　ミーズワ　ニーガイゾ　コッチノ　ミーズワ　アーマイゾ　チャット　コイ　ノマス♪（荒木田）

♪ホッタリコ　ツイコ　アッチャノ　ミーズワ　ニーガイゾ　コッチノ　ミーズワ　アーマイゾ　ツイコ　ツイコ　ノマス♪（里川）

（注）ツイコ…露のことか。ツリャ…連れ（＝仲間）は。

集落によって微妙に歌詞は異なりますが、南部の白山田・那谷でも少し似た歌が聞かれましたので、小松の〈蛍とり歌〉の古い形ではないかと想像しています。

連載18

〈面子〉の方言

パパ難しいよぉー
はじめてメンコにチャレンジ。堀口　浩さん（島町）と琴絵ちゃん（8歳）、桃香ちゃん（3歳）の親子

たたきつけて、めくりっこ

〈面子〉というのは江戸時代からある玩具ですが、ボール紙製の紙面子が流行したのは明治後期からと言われます。40歳以上の人（特に男性）なら、小さいころ、丸い面子を地面や床にたたきつけてめくりっこなどしたことを懐かしく思い出されるに違いありません。今の子供たちが面子遊びをしなくなったせいか、共通語形メンコは意外に普及しておらず、小松でも高年層を中心に多彩な方言形が聞かれます。

小松で聞かれた〈面子〉の方言形は、マルウチ、マルケン、パス、パッチ、カッタの5種類に大きく分けられます。

丸い形からマルウチ、マルケン

マルウチ、マルケンの類のマル～は、その丸い形からでしょう。マルウチの類は、郷谷川流域の尾小屋から金野までと、大杉谷川流域、梯川下流域、さらに旧小松町域などに分布します。「丸打ち」の意と思われます。マルケンの類は、滓上川流域の中ノ峠から岩渕までと、それに続く鵜川・遊泉寺から古府までの範囲に分布します。「丸券」あるいは「丸拳」の意でしょうか。

遊ぶ時の音からパス、パッチ

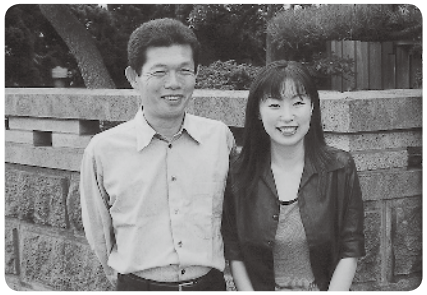
一方、パス、パッチの類、特にパッチは、〈面子〉をたたきつけた時の音を写した形でしょう。パスの類は、日本海沿岸部と木場潟周辺、大杉谷川中・下流域、さらに日用川流域を含む南部地区までの広い範囲に分布します。パッチの類は、郷谷川上流部の尾小屋・西俣、少し離れて北浅井、白江、佐々木、五国寺・花坂などの集落に囲まれた範囲に分布します。音を写したと言えば、丸山でシッペン、尾小屋でベッタ、金平でペッタという形も聞かれました。

カッタの類は北部の中海、軽海、荒木田・千代・能美、大杉谷川上流域、加賀市との境に近い日末・佐美などに分布します。昔は四角い紙面子もあったようですから「カルタ」と関係があるかもしれません。

かつて面子遊びを通じて、それぞれの方言形が子供たちの口から口へと伝えられていった様子が目に浮かぶようです。

連載19

〈雷〉の方言



いつもは優しいお父さん。
でも、たまーに落ちる雷はコワ～イゾォー
休日に一緒に買い物に出掛ける仲良し親子。
木村建一さん、和美さん（義仲町）

あたかも、雲上の雷神が激しく太鼓を打ち鳴らすかのように鳴り響く雷（「神鳴り」の意）は、地震・火事とともに、怖いものの代表の一つとされます。全国的に、雷の方言形に～サマという敬称がつくことが多いのも、それに対する人々の畏敬の念の現れと言えるでしょう。

北陸の雷は夏よりも冬が本番

雷は、太平洋側の地方では夏のものと相場が決まっています。雷雲の発する光が古来イナビカリ（稲光）、イナズマ（稲妻）と呼ばれ、稲穂の実りを招くと信じられてきたのも、夏の雷に由来するものです。しかし、北陸など日本海側の地方では、冬、雪の降る季節に雷の鳴ることが多く、そのことが、共通語の世界にはない冬の雷に対する呼称（小松ではユキフリガミ、ユキガミ、ユキガミナリなど）をも生むことになります。

小松の雷はゴロゴロではなくドンドと鳴る

小松市内での雷（総称）の方言形には、共通語形と一致するカミナリのほかに、ドンドカミ、カンバラ、ライサマなどがあります。

カミナリ類（カンナリ、カミを含む）は、郷谷川流域（尾小屋から東山の範囲）と、加賀市に近い南部地区の一部（下粟津・津波倉・林・粟津・矢田野・矢田・二ツ梨・那谷・菩提・滝ケ原など）で聞かれます。それぞれに、次のドンドカミ類の分布域とは一線を画す形で、まとまった分布を見せていますので、ドンドカミ類が分布を広げる以前からのものと思われます。

一方、カミナリ類の分布域を除いた小松の広い範囲で聞かれるのがドンドカミ類（ドンドガミ、ドンドンカミを含む）です。ドンドとは雷の音を写した形。「ドンド（と鳴る）神」の意でしょう。この類は、県内でも小松を含めた旧能美郡の範囲に分布が限られるようで、この地域で独自に生まれた形と考えてよさそうです。

カンバラ、ライサマは大日川上流部の丸山で聞かれました。ライサマは「雷様」でしょう。カミナリよりもさらに古い分布の名残ではないかと考えています。